

**[D年] 聖霊降臨節第4主日(2024年6月9日)****【旧約聖書日課】ハバクク書 2章1~4節**

- 1 わたしは歩哨の部署につき  
 砦の上に立って見張り  
 神がわたしに何を語り  
 わたしの訴えに何と答えられるかを見よう。
- 2 主はわたしに答えて、言われた。  
 「幻を書き記せ。  
 走りながらでも読めるように  
 板の上にはっきりと記せ。」
- 3 定められた時のために  
 もうひとつの幻があるからだ。  
 それは終わりの時に向かって急ぐ。  
 人を欺くことはない。  
 たとえ、遅くなっても、待っておれ。  
 それは必ず来る、遅れることはない。
- 4 見よ、高慢な者を。  
 彼の心は正しくありえない。  
 しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」

**【使徒書日課】ヨハネの手紙一 2章22~29節**

<sup>22</sup>偽り者とは、イエスがメシアであることを否定する者でなくて、だれでありましょう。御父と御子を認めない者、これこそ反キリストです。<sup>23</sup>御子を認めない者はだれも、御父に結ばれていません。御子を公に言い表す者は、御父にも結ばれています。<sup>24</sup>初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にもいるでしょう。<sup>25</sup>これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。<sup>26</sup>以上、あなたがたを惑わせようとしている者たちについて書いてきました。<sup>27</sup>しかし、いつもあなたがたの内には、御子から注がれた油がありますから、だれからも教える必要がありません。この油が万事について教えます。それは真実であって、偽りではありません。だから、教えられたとおり、御子の内にとどまりなさい。

<sup>28</sup>さて、子たちよ、御子の内にもいつもとどまりなさい。そうすれば、御子の現れるとき、確信を持

つことができ、御子が来られるとき、御前で恥じ入るようなことはありません。<sup>29</sup>あなたがたは、御子が正しい方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずです。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 3章22~36節**

<sup>22</sup>その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行って、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。<sup>23</sup>他方、ヨハネは、サリムの近くのアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであったからである。人々は来て、洗礼を受けていた。<sup>24</sup>ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。<sup>25</sup>ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。<sup>26</sup>彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながその人の方へ行っています。」<sup>27</sup>ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。<sup>28</sup>わたしは、『自分はメシアではない』と言い、『自分はその方の前に遣わされた者だ』と言ったが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。<sup>29</sup>花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。<sup>30</sup>あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」

<sup>31</sup>「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。<sup>32</sup>この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。<sup>33</sup>その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。<sup>34</sup>神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が“霊”を限りなくお与えになるからである。<sup>35</sup>御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。<sup>36</sup>御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ハバクク書2章1～4節

1 私は見張り場につき

砦の上に立って見張りをしよう。

主が私に何を語り

私の訴えに何と答えられるかを見よう。

2 主は私に答えられた。

「この幻を書き記せ。

一目で分かるように

(直訳→それを読む者が走るために)

板の上にはっきりと記せ。

3 この幻は、なお、定めのため

終わりの時について告げるもので、

人を欺くことはない。

たとえ、遅くなっても待ち望め。

それは必ず来る、遅れることはない。

4 見よ、高慢な者を。

その心は正しくない。

しかし、正しい人はその信仰(別訳→真実/誠実)によって生きる。」

## ヨハネの手紙一2章22～29節

22 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくて、誰のことでしょか。御父と御子を否定する者、これこそ反キリストです。23 御子を否定する者は皆、御父を持たず、御子を告白する者は、御父を持っているのです。24 初めから聞いたことが、あなたがたの内にとどまるようにしなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内にとどまるならば、あなたがたも御子と御父の内にとどまります。25 これこそ、御子が私たちと交わされた約束、永遠の命です。

26 あなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書きました。27 あなたがたの内には、御子から注がれた油がとどまっているので、誰からも教えを受ける必要はありません。この油があなたがたにすべてのことを教えます。それは真理であって、偽りではありません。ですから、その油が教えたとおり、御子の内にとどまりなさい。

28 そこで、子たちよ、御子の内にとどまりなさい。そうすれば、御子が現れるとき、私たちは確信を持ち、御子が来られるとき、御前で恥じるようなことがありません。29 あなたがたは、御子が正しい

方だと知っているなら、義を行う者も皆、神から生まれていることが分かるはずですよ。

## ヨハネによる福音書3章22～36節

22 その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行って、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。23 また、ヨハネは、サリムに近いアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであったからである。人々は来て、洗礼を受けていた。24 ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。25 折しも、ヨハネの弟子のある者たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことで論争が起こった。26 弟子たちはヨハネのもとに来て言った。「先生、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行っています。」27 ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられなければ、何も受けることはできない。28 『私はメシアではなく、あの方の前に遣わされた者だ』と私が言ったことを、まさにあなたがたが証ししてくれる。29 花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人は立って耳を傾け、花婿の声を聞いて大いに喜ぶ。だから、私は喜びで満たされている。30 あの方は必ず栄え、私は衰える。」

31 上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべての者の上におられる。32 この方は、見たこと、聞いたことを証しされるが、誰もその証しを受け入れない。33 その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確かに認めたのである。34 神がお遣わしになった方は、神の言葉を語られる。神が霊を限りなくお与えになるからである。35 御父は御子を愛して、その手にすべてを委ねられた。36 御子を信じる人は永遠の命を得る。しかし、御子に従わない者は、命を見ることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・6月9日「聖霊降臨節第4主日」の日課主題は「信仰の道」。

・旧約聖書日課は、「ハバクク書」から、主の示される幻に心留めるべきことを告げる箇所。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、反キリストを戒め御子の内に留まるべきことを告げる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、主イエスについて洗礼者ヨハネが見解を述べたことを伝える箇所。

**旧約日課(ハバクク2章より)**

・「ハバクク書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四巻「十二小預言者」の8番目に収められた預言文書。冒頭 1:1 に「預言者ハバククが、幻で示された託宣」という標題が付されているが、預言者本人に関する情報は限定的で、出自は不明である。他方で、「十二小預言者」文書中、標題で「預言者」の呼称が付されているのは、この「ハバクク」のほかは、「ハガイ書」と「ゼカリヤ書」のみである。「ハガイ」および「ゼカリヤ」は、バビロン捕囚後のペルシア支配下でエルサレム神殿再建事業が進められる時代の人物であり、「律法と預言者」という枠組みの正典編纂を推し進めた「預言者主義」の祭司集団との直接的な関係が推認される。おそらく、「ハバクク」は、王国時代の他の祭司出身預言者のように示せる血統の出自ではなかったが、正典編纂を推し進めた「預言者主義」の祭司集団から見て「預言者」のモデルとしてふさわしいとみなされたのだろう。

・「預言者ハバクク」は、「十二小預言者」の中の配置や本文の記述(1:6「見よ、わたしはカルデア人を起こす」など)から、前7世紀中盤以降、アッシリアが新興バビロニア(カルデア人が支配層)およびメディアによって急速に力を失い滅んでいった時代に、南王国ユダの宮廷預言者として預言活動を行った預言者と考えられる。この時代、南王国ユダの宮廷は、北王国イスラエルが滅んだ前世紀から続くアッシリアの属国としての地位から脱すべく模索していた。「列王記下」22~23章に描かれるヨシヤ王の治世は、アッシリアからの属国支配を脱し、新興バビロニアと手を結ぶことによって、旧北王国領域までを支配下に置こうとした南王国宮廷の政治的野心が見え隠れする。「ハバクク書」は、「カルデア人」の新興バビロニアと旧宗主国アッシリアおよびその同盟国エジプトとの間で翻弄される南王国において、宮廷預言者が世界情勢を見極めるべく告げたものと解することができよう。

・4節直訳「見よ、持ち上げられた者を。その魂は直立しない。しかし、義なる者はその真実(エムナー・アメン)によって生きる」。この句は、「新約」での引用(ロマ1:17、ガラ3:11、ヘブ10:38)が見られるほか、ユダヤ教「タルムード」でも「613の戒めの要約」とみなす解説が見られる。

**使徒書日課(Iヨハネ2章)**

・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」「手紙二」「手紙三」と共に「ヨハネ文書」の一つとして扱われてきた書簡文書。「ヨハネ文書」は、教会伝承で「使徒ヨハネや長老ヨハネの指導のもとにあった教会共同体」が生み出した文書として受容され、正典として扱われてきたが、これらの文書に著者名として、あるいは使徒名として、「ヨハネ」の名が出てくることはない。著者名として「ヨハネ」の名が記される「ヨハネの黙示録」は、通常、「ヨハネ文書」とは区別される(「ヨハネの黙示録」著作の経緯はほとんど何も確定的なことが知られないが、おそらく、「ヨハネの教会共同体」の伝統と「パウロらの教会共同体」の伝統の両方の思想系譜を統合する意図をもって作成されたのだろう)。「ヨハネ文書」各書間の関係性は、その内容から推察されてきた。すなわち、次のような経緯が仮説として提示されてきた。まず自分たちの教会共同体のキリスト理解の核心を明確にする目的で初版「ヨハネ福音書」が作成されたが、その内容を巡って内部に対立が生じ、その対立に対処し初版「ヨハネ福音書」の正しい解釈を提示するために「手紙一」が作成され、その解釈および他の伝統を持つ「教会共同体」のキリスト理解と整合性を図るために改訂版「ヨハネ福音書」がまとめられた。これらの一連の経緯の中で、個別の牧会指導を目的に「手紙二」および「手紙三」が著された。このように仮定される経緯に沿って「手紙一」の解釈を試みる。

・「手紙一」の主要な主張は、イエスを「キリスト(メシア)」と認めて、その教えの原点である「互いに愛し合うこと」に立ち帰るべきである、ということにある。「ヨハネ文書」は、ギリシア語の「キリスト」をヘブライ語の「メシア」の訳語として明示して用いている(ヨハネ1:41で「油注がれた者」と訳されているのは、ギリシア語「クリストス」である。すなわち、「メシアはクリストスの訳語である」と説明している)。つまり、すでに初期教会(特にギリシア語話者の信者)の間でイエスの敬称として定着しつつあった「キリスト(クリストス)」の呼称について、本来的に旧約聖書=ユダヤ教の「メシア(油注がれた者)」観に即して理解されるように、注意喚起をしているのである。1世紀当時のユダヤ教における「メシア」観では、黙示文学的終末観に基づく天的存在の「メシア」像が皆無であったわけではないが、基本的には、「ダビデ王」のような地上の存在でありながら神の使命を帯びた「メシア」像が一般的であった。つまり、「ヨハネ文書」は、「キリスト」が指し示す者として、神的・霊的(また仮現論的)存在ではなく、地上的・人間的存在でありながら神の使命を担う者を想定している。「手紙一」は、そのような「キリスト」としてイエスを認めることを否定する者(仮現論者!?)を「反キリスト(アンティクリストス)」と呼び、そのような理解に反対しているのである。「反キリスト」の用語は、「ヨハネ文書」だけに見られる(Iヨハ2:18,22、4:3、IIヨハ7節)。

**福音書日課(ヨハネ 3 章より)**

・日課箇所は、主イエスと洗礼者ヨハネの関係性を伝えるためにまとめられた説話である。「ヨハネ福音書」は、冒頭物語で共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)と並行する洗礼者ヨハネと主イエスの接点説話を伝えているが、日課箇所の説話も、共観福音書が逮捕後の洗礼者ヨハネと主イエスの関りを伝える説話(マタイ 11:2~19、同 14:1~12、マルコ 6:14~29、ルカ 7:18~35、同 9:7~9)に相当するものとして解することができる。すなわち、洗礼者ヨハネは、主イエスの先駆者として位置づけられる者であり、洗礼者ヨハネが去る(投獄、殺害)ことは、主イエスが表舞台に登場する上で必然であるという理解が示されている。なお、31 節以下は、洗礼者ヨハネの発話伝承としてではなく、福音書著者の解説として記されていると解される。

・主イエスと弟子たちが「洗礼活動」をしていたことを伝えるのは、「ヨハネ福音書」のみである。「洗礼」は、「洗礼者」の呼称に見られるように、「洗礼者ヨハネ」とその弟子たちの中心的な活動であった。「ヨハネ福音書」は、その「洗礼者ヨハネ」の弟子たちの数人が主イエスの最初の弟子になったとしており(1:35~40)、主イエスと弟子たちの活動が「洗礼者ヨハネ」と弟子たちの活動をそのまま継承したものであったことを強調している。もっとも、両集団の連続性については、「マタイ福音書」でも、両者の宣教の言葉(3:2/4:17「悔い改めよ。天の国は近づいた」)を一言一句同じものとして描くことで示している。ところが、「ヨハネ福音書」は、日課箇所の描写にもかかわらず、続く箇所では、主イエスと弟子たちが行っていた洗礼活動では、「洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである」(4:2)とわざわざ断っている。この挿入句は、本福音書の改訂作業の中で付加された可能性もあるが、いずれにしても主イエス自身が洗礼を授けていたことを敢えて否定する必要があった、ということが明白である。実際、共観福音書では、復活後の主イエスの命令によって弟子たちが洗礼の実践を教会活動の中核に据えたという建付けで描かれており、公生涯中の主イエス自身が洗礼活動に携わっていたと思わせる記述は一切見当たらない。おそらく、「洗礼者ヨハネ」の実践していた「洗礼」には、受洗者(志願者)が授洗者(執行者)の「弟子」になるという入門儀礼的な意義が強くあったのに対して(4:1 の叙述も、そのような「洗礼」を推認させる)、使徒たちの教会が実践する「洗礼」では、授洗者(執行者)が誰であろうと、受洗者(志願者)は主イエスの「弟子」となる、あるいは「主イエス」と結ばれる、という入信儀礼的な意義に移行させられていたのだろう。この相違を明確にするためには、たとえ使徒たちであっても、主イエスから直接「洗礼」を授けられたというような事例は例外的な特権的弟子集団を認めることになり、不都合であったのだろう。教会は、洗礼を「イエスの名」または「父と子と聖霊の御名」によって授けるという実践を発展させた。

・日課箇所は、ヨハネの弟子たちとユダヤ人との間で「清めのこと」で論争があったということに触れながら、多くの人が主イエスのもとに行き、洗礼を受けているという報告がヨハネに告げられたという展開をしている。「清めのこと」の論争と、主イエスのもとに人々が行き、そこで洗礼を受けているということは、必ずしも関連性が無いようにも考えられる。しかし、ヨハネの「洗礼」は、上述の入門儀礼的な意義とは別に、第一義的には「悔い改め」のしるしとして実践されていたことであり、ユダヤ教で広く実践されていた沐浴による「清め」の形式を用いていた。「清め」の問題が主イエスの宣教においても重要な課題の一つであったことは、「カナの婚礼」の説話中でも示唆されており(2:6)、ヨハネの弟子たちとユダヤ人との間であったという論争が、「洗礼」実践を通して、主イエス(と弟子たち)とユダヤ人との間の論争に移行した、ということを示そうとしているのであろう(4:1~3 も参照)。

**来週の誕生日 (6月9日~15日)****主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-171 番「かみさまのあいは」(=☐40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。
- ・21-544 番「イエスさまが教会を」は、『讃美歌第二編』編纂に際して公募入選した讃美歌。歌詞は、日キ鎌倉栄光教会信徒の石田直矢が家庭礼拝のための歌として作詞。曲は、阿佐ヶ谷教会信徒・小山彰三。
- ・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。

**21-509「光の子になるため」*****I want to walk as a child of the light***

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus.  
/ God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] *In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.*
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus.  
/ Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus.  
/ When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.